

つくりなおされる身体

—— アントナン・アルトー、その身体化の過程 ——

佐々木 泰 幸

序

「私は身体を持っていない。」という文について考えてみよう。反駁するにせよ、意味の理解に努めようとするにせよ、おそらく疑問を投げかけずにはすまない表現であるに違いない。思いつきに近い形でさえ、この「私」とは誰なのか、「私」でないものなら身体を持つことができるのか、身体以外に私は何を持っているのか、身体を「持つ」ことは可能であるのかどうか、いくつもの問いを立ててみることができる。無論、そのすべてに解答を与えることは私の力にはあまるだろうし、たとえひとつであれ、軽々しく論じるには困難な問題であるだろう。そこで、ここではアントナン・アルトーのテキストを通じ、この身体というつかみがたい問題へ接近する手がかりのようなものを探してみようと思う。何故ならアルトーは身体性ということにとりわけ鋭敏であったし、身体を、たとえば精神との単なる二項対立とはとらえず、さまざまな語や概念と接続させて思考し続けたからである。そしてアルトーはみずからの身体に関わる思考を、身体そのものを使うことでさらに深化させようとした。その実践への過程を広い意味で演劇と呼ぶこともできるだろう。アルトーは言う。「身体を持たねばならない。私がいると言わねばならない。¹⁾」おそらくここではまだ「私」は身体を持っていない。少なくともアルトーにとっては、身体なしに「私」の存在を言明することはできないのだ。身体がすでに私のものであると言える権利は奪われている。そのためアルトーは身体を求め、問い直し、探求を試み続けるのである。

1. 身体を孕むこと

二十代の頃、すでにアルトーにとって身体はひどく「不自由」なものであったようだ。もちろんそれは深刻な抑鬱症と関連して阿片を常用するようになったということもあるだろう。アルトーの身体は麻薬に依存し、中

毒症状に陥っていた²⁾。抑鬱は確かに心理的な障害ではあるだろうが、それは身体による行動を制限したであろうし、麻薬は身体がそれに束縛されるばかりか、実際にアルトーの健康にも影響を及ぼしたに違いない。しかしアルトーの感じている「不自由さ」とは単純に生理学的なものだけによるとはいいきれないようだ。アルトーの身体は彼に苦しみを与えるのだが、その苦しみは思考と不可分であり、身体は、思考が不可能だとアルトーが言ったのと同様、さまざまな「不能力」を抱えるものとなる。たとえばそれはミイラの肉体のように現れてくるだろう。

この肉体、生の中でもはや自らに触れることのない、
この舌、自分の皮からもう外に出ることのできない、
この声、音の道をもはや通っては行かない、
この手、つかむという行為だけでなく多くを忘れてしまった、それは捕捉を実現する空間をもはや決定することはできない。

この脳、すなわちそこでは着想 conception がもはやその線の中で決定されることはない。

(…)

このミイラの中にはある肉体の喪失がある。ミイラの知的な肉体の暗い話し方の中に、この肉体を祓うことの不能力がそっくり入っている³⁾。

ミイラとは確かに人間であったものだが、水分とともに弾力性は失われ、干からびたその肉は腐敗という有機的分解も受けずに、有機物と無機物の中間のようにして半永久的に存在し続ける（燃焼し、灰となる可能性は残っているととしても）。そしてアルトーにとり、ミイラの舌＝言葉 langue は機能を失うかあるいは「不能力」と結びつくしかない。何よりも、言語を発するという行為が欠けたままの肉体、それがミイラなのだ。このミイラには頭脳はあるらしい。しかし運動と言語化の能力を欠いているのだ。ミイラの脳は思考の萌芽を抱くことはできるだろう。アルトーは思考する。だがそれは「奪われてしまう⁴⁾」のだ。思考の萌芽、種子のようなものを「conception」と呼べるかもしれない。それは着想や構想であり、まさに思考が生まれようとするその瞬間を表わす語であり、身体を持とうとする人間を孕む「妊娠」であるだろう。妊娠とはひとつの身体の中に他者が生まれ育ち、もうひとつの身体を得る過程に違いない。それがいつ「ひとつ

の」身体とみなされるか確定することは困難だが、アルトーは思考の中にも同じ過程を見出している。思考とは自己の中に他者を孕むことであるからだ。だがこの胎児は流産してしまう⁵⁾。エヴリーヌ・グロスマンはこのアルトーにおける思考の流産について「Concevoir la pensée」と題した文章の中で以下のように述べている。

ところが思考はアルトーにとって、まず何よりも思考に身体を与えることだった。ひとつの形の中でそれを受肉化することだった。同じジレンマがここ（筆者註：アルトー全集 24 巻 173 頁-174 頁からの引用）でまた見られる。思考が生にいたらずに流産するにせよ、思考が死んだ言語 *langage* の首枷の体の中で凝固するにせよ、「*terme*」とは言葉 *langue* の羊皮のような皮膚であり、思考の生きた肉体から切り取られ、ミイラ化し、硬直した彼の身体なのだ。いつも彼がぶつかる「*terme*」においてアルトーはひとつの思考を《孕も》*concevoir* うとする⁶⁾。

思考はその着想 *conception* だけでは十分ではなく、身体が必要であったのだ。アルトーは何度でも身ごもるだろう。だがその未熟な身体は「*terme*」の中で死んでしまう。「*terme*」は期限であり、境界であり、用語である。すなわち、時間や空間や意味、言語の限界を定め、そこで終わりを宣告するものだ。時にその語は出産予定日をさえ意味するが、この定められた期日は十全な結果を招く「自然な」ものではなく、むしろ一方的で尚早な出産を強いるものであるだろう。思考は「*terme*」から出ることはできず、それに従うより他はない。「*terme*」はもはや変化することのない硬直したミイラであり、動くことも呼吸することもない。思考は「*terme*」として言語化されたたん石化し、朽ち果てるのだ。アルトーにおいて思考は確かなにされる。その意味でアルトーの思考は受胎せぬ石女ではなく、「失敗」に終わる思考なのだ。この「失敗」は無論、身体を思考に与えることができないということだ。しかしアルトーは思考する以外に身体を与える方法を知らない。アルトーは思考のための身体を手に入れようとさらに思考し、もがき、苦しむだろう。

先に挙げたテキストでは、「ミイラの肉体」は硬直した死体として斥けられている。だが、この時期のアルトーにとって、手に入れるべき肉体 *chair* それ自体は身体 *corps* と同様に用いられ、肯定的価値を持つものだ

った。ただしそれは今ここにあるみずからの肉体，身体ではない。アルトーにとってすでにある肉や体は一度否定され，再び獲得されるべきものであった。こうした否定と希求の運動は晩年に近くなっても変わることなく繰り返される⁷⁾。

肉体であれ，身体であれ，それはまずアルトーに苦痛をもたらすものであった。それらはどちらもが失われているか，「不能」であるが故に思考をも不可能にさせる，硬直，麻痺したものとしてアルトーに現れるのだ。しかし初期においてはいくぶんか肉体という語を好んで使っているように見える。おそらくアルトーにとって肉体はまだより具体的で，直接的な感覚を引き起こすものだったのだろう。やはり二十代のテキストにこんな表現が見られる。

(まさに生に関わる) 死に値する絶望の形，
別離の十字路，
私の肉体 chair の感覚の十字路，
それは私の身体 corps から見捨てられ，
人間の中のあらゆる可能な感情から見捨てられている⁸⁾。

ここでは身体 corps と肉体 chair は分離し，身体が肉体を見捨てるという事態が起こる。身体にはその権利があり，肉体はなす術もなくうち捨てられたままだ。だがアルトーにとってより切実なのはこの肉体の感覚であり，それをまず取り戻さなければならない。もちろんこの感覚は見捨てられた絶望の形としか感じられないのだが，アルトーが出発するのはこの肉の感覚なのだ。それが肉体と身体との存在の裏づけでもあり，その欠如，喪失，病の発現のしるしでもある。十字路とはもちろん交通の場であり，あらゆるものが衝突し，方向を変え，立ち往生する。異質なものが出会いもするが，そこはまたそれらが逃げ去り，四散する場所でもある。感情もそしておそらく思考さえもこの十字路で衝突し，混乱し，アルトーの肉体から去っていく。だが肉体をうち捨てる身体はどこにあるのか。アルトーは「私の」身体と言っている。この身体を探さねば肉体も打ち捨てられたままではないのか。

確かにアルトーはまず肉体において喪失や欠如を感じるのだが，それはやはり身体へと通じる道であり，徐々にアルトーは身体のプロバトーションへと向かうに見える。ロデーズでの収容時代のある時期，キリスト教に接近したア

ルトーは肉 chair を不潔であるとして徹底的に弾劾する⁹⁾。肉は腐敗したものであり、「罪」なのだ。肉を「持つ」ことで人は純潔ではいられなくなる。しかしこの肉はいまだ身体から見捨てられたままであり、限定され、自由を失っている。言わば「terme」の中にとどまったままだ。さらにこの時点では、身体さえも汚れた不完全なものとして否定される。

何故なら人間たちは悪を行うことを止めないからです。悪とはつまり性的な不純ということです。そして彼らが、悪とは性欲《それ自体》であることを理解しようとしなかったからです。—この性的な世界から神は魂たちを引き上げました。そしてそこで我々全員とともにあるのは、もはや自分たちの身体 corps だけであり、その身体はすでにあなたに言ったように、《悪魔なのです》！¹⁰⁾

肉体も身体も「悪魔」となる。だがこの悪魔は、神という絶対存在への抵抗も、「善」を破壊する暴力も担うことはない。それはただ我々に取りつき、腐敗させる負の力をしか持っていない。何故ならそれは制限され、限定されているからだ。そしてこの制限するものとは性である。

アルトーにとって性は人間の身体を縛り、拘束する「terme」であった。性は生殖へと結びつく。生殖は生物的な種^{しゅ}という集団には連続性を意味するかもしれないが、今そこにある生命にとっては他の個体にとって代わられる準備であり、生の期限、交代を強いられるものだ。そしてその結びつきは血という形でも人間の意識を束縛する。だがアルトーは血縁も世代も家系も拒否するだろう¹¹⁾。

一方、性は生殖という生物の「義務」としてのみ備わってはいない。それは快樂としても我々をとらえる。もちろん快樂は時としてよろこびであり、よろこびは自由と結びつくものではあるが、性あるいは生殖の課す拘束は、我々から意志や欲望などの面で自由を奪うこともあり得る。では快樂はどこにあるのか。おそらく器官において生み出されるのだろう。快樂を「感じる」脳もこの意味では器官化している。器官は時に性と結びつき、時に超越的な「法」として感覚を支配し、思考をも器官化してしまうのだ。アルトーはすでに若い時から器官の精神への関わりを否定している。

私は「精神」であるものの何物もあきらめない。私はただ私の精神を、その法と器官とともに、他へ移動したいのだ。私は精神の性的自

動性から解放されていないが、逆にこの自動性の中で明晰な理性が与えてくれぬ、さまざまな発見を分離しようとするだろう¹²⁾。

アルトーは精神を性的自動性から、器官から解放しようとする。精神とは思考を可能にする場であり、器官から解放された脳が持つべき名であるだろう。アルトーはこの自動性の中でも思考しようとする。だがこの思考は「明晰な理性」からは与えられない。「明晰な理性」もまた、一見器官と対立するように見えて、自動性にかからめとられる可能性を持っているからだ。明晰であればあるほど、理性による思考はすばやく確固としたものになり、他に選択の余地がなくなるが、その代わりそれは一種の反射、自動性に近づく。ある刺激や力に対して秩序立ち、ひとつの論理的な反応をするよう決定されているならば、それは器官になるだろう。この自動性はある面では「強さ」を生むかもしれないが、アルトーはまずその非生命性、思考を停止させる強制力を告発するのだ。

キリストの受肉を経て、アルトーは新たな身体、すなわち「器官なき身体」を得ようとする。だがそのためには器官を持った、器官化された肉体も身体も一度否定されなければならない。思考に身体を与えるため、身体が思考を孕むために。

2. 思考を持つこと

「思考を持つ」という表現それ自体は可能である。「思考」を「思想」と言ってもいいし、「考え」と言うこともできる。それは多くの場合、思考が何らかの形があるという前提、たとえ不定形だとしても無形ではないという前提で用いられる表現であるだろう。思考はそこにあり、この手でつかまえることのできる対象であるのだ。

だがアルトーはこの「思考を持つ」ということを否定している。あるいはもしそのようなことがあり得るならどういうことであるのかをこんな風に説明する。

そして私はとりわけ、こう断言する。私は思考を持たないと。
(...)

何故なら私は《思考を持つこと》、あるいは正しく見る、正しく《考える》とも言えるかもしれないが、そういうことを必要としていないからだ。私にとって思考を持つとは、自己の思考を《維持する》こと、

自己自身に思考を明示する状態にあること、思考が感情と生のすべての状況に対してこたえ得るということであり、特に、『自己にこたえる』ということなのだ¹³⁾。

アルトールは自己 *soi* という語を繰り返す。明らかにここには思考とこの自己との間における乖離があるが、それらは対応し、通じ合い、つながりを持たねばならないのだ。若きアルトールの苦悩の源泉はこの乖離であり、思考が「自己にこたえる」ようになるためにアルトールは思考する。それは一種の無間地獄に陥る可能性、抜け出すことのできない循環にとらわれる可能性があるのだが、かと言って、アルトールには、つまり我々には思考するしか道はない。思考のために思考するという反復は人間を頭脳の空間に閉じ込めてしまうかもしれないが、アルトールは思考するという反復を通してその閉塞を破ろうとする。この思考する *penser* ということをフィリップ・ソレルスは行為 *acte* であると言う。

すでに見たように、アルトールにとって思考する *penser* とは、それによって我々が、我々の思考 *pensée* でありたいと欲する行為以外のものではあり得ない。つまり、思考の記号の圧縮された集積、それらの理解、過剰など、限定された特殊な思考の秩序の中で、我々がまだなることのないあらゆるものでありたいと欲するということである¹⁴⁾。

アルトールにとり、我々と、我々の思考の間の裂け目を埋めようとする行為が思考することなのだ。思考 *pensée* と我々の間の距離がなくなること、それはすなわち我々が「思考である」ということであり、「思考を持つ」ということであろう。しかしそこに至るためにはまず「思考する」*penser*という行為が必要なのだ。この思考と思考することの差異と重なりが、アルトールの、「思考を持たない」と言っておきながら、みずからとっての「思考を持つ」ことを肯定的に述べる、矛盾するかのような発言を生むのだ。「思考を持つ」あるいは「思考である」とはアルトールにとって思考と自己が対応し続けること、思考と自己が同一のものではないとしても、つねに連続し、接触し、関係し続けるということである。それは思考が自己という存在と同じように存在するということだろう。思考もまた「持続」するのだ。しかし、この持続とは変化をしないということでも、固定されるということでもない。アルトールはこの「持続」というベルグソ

ンの言葉を借りて思考という存在の運動性をこう表現する。

知っての通り、人は思考をつかまえることができない。(…)自分の意識を見つめるためには、それを分割しなければならないのであり、さもないと、我々に自分の思考を見ることを許すこの合理的能力は決して働くことができないだろう。しかし現実には、意識は、ベルグソンが《純粋持続》と呼ぶ、ひとつの塊なのだ。思考の中に停止というものは存在しないのである¹⁵⁾。

思考には停止がない。何故なら、思考するとは行為であり、運動であるからだ。思考を持つために思考しなければならないのだが、行為が可能になるためには身体がなければならない。運動が起こるためには物体が必要のように、さしあたってアルトーに必要な、あるいは不可避なことは思考するという行為であり、その行為は身体を要求するのである。

ではこの思考するという運動はどのようなものであるのか。アルトーはそれを「食べる」ことだと言っている。

文化とは食べることであり、また、いかに食べるかを知ることである。私にとって思考する *penser* とは、さまざまな思考 *pensées* を食べ、貪り、消化吸収することである。私は外部から自然の印象を受け取り、それを思考として排泄する。私に思考させ、食べさせるのは、同一の生の行為 *acte* であり、同一の生命の機能なのだ。身体の活動と、知性の活動を分離するのは、生についての問題の立て方として間違っている¹⁶⁾。

捕獲し、切り裂き、火であぶり、噛み砕き、飲み込み、消化する。食べるという行為に、何と膨大な時間と労力がかけられることだろう。「食べる」ことはそれらあらゆる行為を内包し、さまざまな過程と要素が集積されて初めて実現する。おそらく思考することも同様である。食べるものがある意味で破壊し、変質させ、分解すること、そしてそれを吸収することが食べるということなのだ。

さらに我々は食べたなら排泄しなければならない。アルトーの最晩年のテキスト『神の裁きと決別するために』¹⁷⁾の中に「糞便性の研究」という章があるが、そこでアルトーは「糞の臭うところには存在が臭う。」と言っ

ている。排泄物は単なる汚物でも不要物でもない。食べることを、思考することという行為の中で生み出される「存在」であり、人間は「生きることを選んだ」が故に「糞をする」のだ。だがこの糞は思考の「目的」ではもちろんない。思考の「完成」としてできあがる構築物ではないのだ。それはまさに排便するために食事をとるわけではないようにである。

しかしいかなる場合でも我々が「食べる」ものは我々自身ではない。食べるためには他の存在が必要であり、我々はみずからの「外」を食べるのだ。動物が、食べなければならない故に動けるのか、動けるからこそ食べることができるのかは断じがたいが、とにかく食べるために動くことでエネルギーを消費し、そのエネルギーを補うためにまた食べる。植物のように、運動することがなければ食べることから思考することからも解放されるだろう。（もちろん「植物の思考」という可能性も探ることができるかもしれない。しかしとりあえずここでは思考を人間の行為としておこう。）だが我々は食べることも思考することも拒んで生きることはできない。それはつねに「外」を必要とするということである。アルトーにおける思考するという行為は、思考を「それ自体の外にある力」、「外のもろもろの力と直接関係させること¹⁸⁾」だからだ。この「外」は内部に対する「外」、内部にある「外」、外部の「外」などとして、思考する限りあらゆるところに現れてくるものだ¹⁹⁾。「外」をつくりだすこと、なにごとかを「外」にすること、そしてまたその「外」と関わり、それを食べることに、それこそが思考するという運動の行程であり、その際限のなさには我々は浸されているのである。

「外」を持つことは身体を持つこと、身体になることだろう。つまり食べることを、思考することが可能であると同時に宿命になるということだ。だが思考に要請される身体もまたアルトーにとっては依然として「自己にこたえ」ていない。身体を持つ、あるいは身体であるためにはどうすればよいのだろうか。おそらく思考における思考することと同様に、何らかの「行為」あるいは運動が必要なのではあるまいか。そしてアルトーの表現や実践はそこに向かっていくように思われるのだ。

3. 身体化すること

アルトーにとって今そこにある身体、あるいは一般に身体と呼ばれているものはどのようなものであったか。少なくとも晩年にはかなり強い意味で否定的にとらえられている。すでに見たようにロデーズ時代に性的な身

体は「不潔」なものとして斥けられているし、その後のテキストにおいても、「人間の身体はオカルトと姦通させられ」、「四肢と器官」は「おぞましいものとな」り、「身体たち」は「悲慘に切り詰められ²⁰⁾」てしまっている。アルトーにとって身体はつくりかえなければならないものであったのだ。「身体を持たねばならない」のだとしたら、その「身体」は今とは違う形で存在しなければならないだろう。だがそれはどうあるべきなのか。

よく知られているように、ドゥルーズはアルトーのまだ見ぬ身体を、アルトー自身の言葉である「器官なき身体」として抽出し、そこからさまざまな概念をつくり出していった。たとえば『感覚の論理学²¹⁾』の中でフランシス・ベーコンの絵を見る時にも、ドゥルーズは「器官なき身体」を用いて画布上の身体へと接近するのだが、だとすれば逆に、ベーコンの絵がアルトーの「身体」を照射することも可能であるに違いない。

身体は、明確にしようとしている、あるいは望んでいる。みずから逃れ出ることを。私の身体から逃れようとしているのは私 moi ではない。身体こそがそれ自身から逃れようとしているのだ。つまり痙攣によって (...) ²²⁾。

この身体が逃れ出ようとしている「私の身体」とはもちろん「器官」としての身体、器官の支配下にある身体であろう。しかしドゥルーズはアルトーの捨て去ろうとした器官を単なる *organes* としてとらえるのではなく、アルトーを引用しながら、さらにその定義を厳密にし、拡張する。

有機体 *organisme* の外に、そしてまた生きている身体の境界としても、アルトーが発見し名づけた、器官なき身体がある。『身体は身体だ。それはひとつであり、器官など必要としない。身体は決して有機体ではない。さまざまな有機体が身体の敵なのだ。』器官なき身体は器官よりも有機体と呼ばれる、あの器官の有機化 *organisation* の反対物である ²³⁾。

ドゥルーズは繰り返し「器官なき身体の敵は器官 *organes* ではない。」と述べている。それは有機体 *organisme* であると。有機体は身体を体系立て、それに秩序を与え、「terme」を言い渡すものだ。その有機体が機能すること、うまく働くことがよりよく生きることであり、我々の生の日

的となる。その時身体はひとつのシステムとなり、余剰や錯誤、不均衡や矛盾は排除されていく。身体は決定されたものを好み、徐々に未決定な要素は捨てられていくに見える。

実のところ、器官なき身体は器官を欠いていない。それは有機体 *organisme* のみを欠いているのだ。つまり、あの器官の有機体を。有機体が決定された諸器官 *organes déterminés* によって定義されるのに対して、器官なき身体はしたがって《未決定なひとつの器官》 *un organe indéterminé* によって定義される²⁴⁾。

しかしドゥルーズはさらにこの決定＝未決定 (*déterminé-indéterminé*) の二項対立すらも踏み出してしまう。

つまり器官なき身体は、器官の不在によっては定義されない。それは未決定なひとつの器官 *un organe déterminé* の存在によってのみ定義されるのではなく、結局、決定された器官 *organes déterminés* の《一時的、とりあえずの存在》によって定義されるのだ²⁵⁾。

一旦決定された器官であれ、その一時性、変化の可能性、非永続性によって器官なき身体がつくりだされることがあるのだ。すなわちそれは、今我々にある器官によってということでもある。このすでに器官のある身体も、退行し、未決定な状態にもどることなく、みずからを変化させ、非有機化し得る。

器官あるいは有機体を拒むために身体は「逃れ出」ようとする。それも「痙攣」という運動によって。痙攣は間断ない動きであるが、規則性も段階もない。肉体は移動するわけでも、何かを表現するわけでもない。ただその場で、伝わる先を持たない力が体内を横断していただく。この力は身体から身体を引き剥がすために内部に充満し、反響し合い、波打つ。身体は身体自身から解放されるまで動き続け、踊り続けなければならないのだ²⁶⁾。

この試みに成功した時、人間は「器官なき身体」を手に入れることができる。「身体を持つ」ためには、「思考を持つ」場合に「思考する」のと同様に、ある行為、ある運動がなされるのだ。この思考することにあたる行為をアルトーの用語に従って、「身体化」 *corporiser, corporisation* と呼

べるかもしれない。

しかし空虚という狭まりは、〈ミサ神〉ではなく、身体が形成される地点なのだ。(…)つまりすべては身体化 *corporisation* へと連れ戻されねばならないのだ。自己 *soi* としての身体の愛もなく、自己に身体を連れ戻すこともなく、自己に身体を近づけることもないままに²⁷⁾。

身体化は身体においてなされる。自己 *soi* が身体から逃れるのではなく、身体自身がそうするように。すでに初期のアルトーは思考の非身体化 *décorporisation* が生をそこなうものだと拒絶している²⁸⁾。思考の身体化そして身体/body化が必要とされるのだ。

身体化のための運動はさまざまな形の痙攣として現れてくる。それは震えであり、波動を引き起こす動きであり、身体/身体のどの部分もその場に固定されることを拒み続けることだ。たとえば叫びのように。

そして叫び、ベーコンの叫びとは、身体全体が、それによって口から逃れ出してしまう働きなのだ²⁹⁾。

身体すべてが叫ぶ口から逃れ出る³⁰⁾。

叫びは言語システムの中に組み入れられることのない純粋な痙攣である。意味から逃れ、感情や思考の表現、代理とはならない力の発現なのだ。身体は全身で震え、大気も揺れる。それは震える、揺れるというよりは身体と空気の二つともが切り裂かれる瞬間であるだろう。その切断は鋭利な用具による滑らかな平面は生み出さず、振動という不定形な波状の運動による軋轢と摩擦を引き起こす。叫びは身体を器官から、身体自身から、そして世界から引き剥がすのだ。もちろん叫んでいるのは身体ではあるのだが、叫びと身体/身体の間の境界は不鮮明になり、ベーコンの絵画のように輪郭が溶解し、身体は叫びそのものになるのである。無論、絵画は沈黙している。しかし空気が振動を伝達するよりも前の叫びがそこにある。絵画は静止している。だが、明確に視覚化することができないはずの震える時間がそこに見えている。身体はそうやって、口からほとばしるのである。

おそらくアルトーにとって書くこともまた痙攣であった。もちろん書く

ことは硬直してしまった思考から、麻痺してしまった舌 *langue* から逃れ出るための運動であったのだが、さらに言えば、それは書くことを、書くこと自体から引き剥がそうとする行為であっただろう。書くという、指先の、手先の、決して大きくはない運動はしかし、身体を貫き、思考を震わせる。書くことはつねに書いている言語を裏切り、書く者の思考を裏切り、それまで「書く」と呼ばれていた行為を裏切っていく。ペンや鉛筆の切っ先が文字であるはずの一定の形式を再現していくのだが、それは書くことから越え出ようとする不規則な、予測不可能な絶え間ない運動である。書かれた文章が「フランス語の響きをたてるのか、パプア語の響きをさせるのか、そんなことはどうでもいいこと」なのだ。アルトーが書くのは「文盲たちのため³¹⁾」だからだ。

書くことはひとつの過程であり、「生」の横断 *passage* だとドゥルーズは「書く」³²⁾。書いている身体は書くことでみずから身体化するのであり、それはつねにそのさなかであるひとつの行為、とどまるということのない「過程」に違いない。書いているその時間、思考も、手先も、速度を変え、時に止まり、時に加速しながらあらゆる方向へ運動を試み、痕跡を残し、あるいは後もどりして痙攣をくり返す。

無論、この身体化の過程はさらにさまざまな形で行われ得る。デッサンを描くこと、詩を読むこと、グロソラリーを発すること、そして何よりもアルトーにとっては演劇がその役割を担うはずであった。晩年アルトーはこうに記す。

私のいう行為とは、人間の身体の真の有機的かつ肉体的な変形をめざすものだ

なぜか

なぜなら演劇とは人が潜在的にまた象徴的に一つの神話を繰り広げるあの舞台上のパレードなどではなく

あの炎と真の肉の坩堝だからだ

骨と四肢と音節を踏みならすことによって

身体は作り直される

そこに出現するのは

身体としてありのままに

身体をつくるという総合の行為だ³³⁾

アルトーにとって演劇とはおそらく、身体自身が身体化という過程を、その行為を直接示す場に他ならないだろう。そこでは思考が思考を、身体が身体をすでに持ってしまったという完了形ではなく、「持つ」ことが運動として、持とうとする試みの道程としてさらし出されるのだ。

「身体を持たねばならない」としても、まず必要なことは、そのための「行為」である。おそらく身体は身体化し続けることを要請される。「私がいる」ということは、すでになされてしまった事実ではない。もし生がすでに生きていることのみを意味するのではなく、生き続けようとすることをも含むのだとすれば、私たちはつねに「生きる」という動詞において生を営んでいる。生を「持つ」ことはできない、あるいは生を「持つ」ためにはまず生きなければならないのである。その時私たちの生は「総合の行為」として、私たち自身の「骨と四肢と音節を踏みならす」だろう。

注

- 1) Antonin Artaud, *Œuvres Complètes* (以下 O.C. と略) XV, Gallimard, 1981, p.268.
- 2) アルトーがはじめて阿片を摂取したのは 1919 年、彼が 23 歳の時とされている。生涯、幾度となく解毒治療を試み、服用を止めようとするも失敗に終わる。真偽は確かではないが、1936 年のメキシコ旅行ではタラフマラ族の儀式に用いられるという麻薬、ペヨートルも体験し、帰国後阿片の量は増大。その直後の精神病院への入院による中断もありながら、晩年にはガンによる苦痛緩和のために阿片を使用したこともあり、アルトーとドラッグとの関わりは生涯続くことになる。
- 3) Artaud, *O.C.I***, 1976, pp.57-58. 千葉文夫『ミイラのみずみずしい肉体』（ユリイカ 1996 年 12 月号 181 頁青土社）に引用訳所収。
- 4) cf. Artaud, *O.C.I**, « Correspondance avec Jacques Rivières », 1976 et 1984. 清水徹他訳『神経の秤・冥負の臍』現代思潮社 1977 年 29 頁-67 頁。
- 5) 全集序文の中にも次のような記述が見られる。「つまり、私にはついにできなかった。自分の骨組み *trame* を、あの流産した詩に導入することは。」「インスピレーションは胎児でしかないし、言葉 *verbe* もまた胎児でしかない。」(*ibid.*, p.9. 同上 6 頁-7 頁.)
- 6) Evelyne Grossman, *Artaud/Joyce le corps et le texte*, Éditions Nathan, 1996, p.33.
- 7) 「初期のアルトーは大変明確に『肉 *chair* の崇拝』を表明している。けれどもアルトーは、思考不可能の中で、いつでも硬直し麻痺した身体に直面している。思考の制度から逸脱した〈肉〉を、そのままアルトーは存在の根拠にするわけ

- にはいかなかった。(…)〈肉の崇拝〉として初期に表明された身体論は、晩年には〈肉の構成〉についての比類ない批判的な思索を形成していく。」(宇野邦一『アルトール 思考と身体』白水社 1997 年 15 頁。)
- 8) Artaud, *O.C.I**, pp.115-116. 同訳書 148 頁.
 - 9) 拙論『アントナン・アルトールの栄光の身体 ― ロデーズにおける神と性 ―』立教大学フランス文学第 28 号参照.
 - 10) Artaud, *O.C.X*, 1974, p.206. 宇野邦一+鈴木創士訳『ロデーズからの手紙』白水社 1998 年 111 頁.
 - 11) アルトールは言う。「私, アントナン・アルトールは私の息子であり, 私の父であり, 私の母である。」(Artaud, *O.C.XII*, 1974, p.77.) さらにアルトールは血の流れ, 血統の序列というものを破壊するかのように, みずからの祖母を, 生涯における重要な女性たちのひとりとして「心の娘たち」に加えている.
 - 12) Artaud, *O.C.I***, p.53.
 - 13) Artaud, *O.C.I**, p.65. 同訳書 95 頁.
 - 14) Philippe Sollers, *L'écriture et l'expérience des limites*, Les Éditions du Seuil, 1968, p.101. 松本雅弘訳『思考は記号を発する』ユリイカ 1988 年 2 月号青土社 100 頁.
 - 15) Artaud, *O.C.VIII*, 1971 et 1980, p.152. 高橋純+坂原真里訳『革命のメッセージ』白水社 1996 年 30 頁-31 頁.
 - 16) *Ibid.*, p.237. 同訳書 158 頁-159 頁.
 - 17) Artaud, *O.C.XIII*. 1974, 宇野邦一訳『神の裁きと決別するため』ペヨトル工房 1989 年.
 - 18) Gilles Deleuze et Felix Guattari, *Mille Plateaux*, Les éditions de minuit, 1980, p.467. 宇野邦一他訳『千のプラトー』河出書房新社 1994 年 432 頁-433 頁.
 - 19) ドゥルーズによる示唆を待つまでもなく, Michel Foucault, *La pensée du dehors*, Fata Morgana, 1986. (豊崎光一訳『外の思考』朝日出版社 1978 年.) を参照のこと.
 - 20) Artaud, *O.C.XIII*, « Le théâtre de la cruauté », 宇野邦一同訳書.
 - 21) Gilles Deleuze, *Francis Bacon Logique de la sensation*, Éditions du seuil, 2002.
 - 22) *Ibid.*, p.23.
 - 23) *Ibid.*, p.47.
 - 24) *Ibid.*, pp.49-50.
 - 25) *Ibid.*, p.50.
 - 26) 晩年のアルトールにはダンスという言葉が演劇と同様, あるいはそれ以上の重要性を持って現われることがある。「人間に器官なき身体を作ってやるなら, 人間

をそのあらゆる自動性から解放してその真の自由にもどしてやることになるだろう。／そのとき人間は再び裏返しになって踊ることを覚えるだろう。」(Artaud, *O.C.XIII*, p.104. 同訳書 48 頁-49 頁.)「私は私の手に／それらの衝動のダンスを教えこむ／私の足にも／あるいは腕にも。／演劇と歌のダンスは、／人体の悲惨の／いかりくった反乱の演劇である」(*ibid.*, p.116. 同書 69 頁-70 頁.)

27) Artaud, *O.C.XV*, p.186.

28) 「しかしまさに問題なのは、思考を厳密に保存してこの意識をどこか定義不可能な場所へ投げ入れてしまうことと同様、わずかな意識のかけらを保存して思考を非身体化 *décorporisation* することによって、生が損なわれることがないか知ることである。」(Artaud, *O.C.I**, p.65. 同訳書 95 頁.)

29) Deleuze, *op.cit.*, *Francis Bacon*, p.24.

30) *Ibid.*, p.33.

31) Artaud, *O.C.I**, pp.9-10. 同訳書 8 頁.

32) Gilles Deleuze, *Critique et Clinique*, Les Éditions de Minuit, 1993, p.11.

33) Artaud, « Le théâtre et la Science », in *L'Albalète*, n°13, été 1948. 坂東光之訳『肉体言語 11 アントナン・アルトー特集号』肉体言語舎 1983 年 10 月 92 頁-93 頁.

引用に際しては邦訳を参考にして私訳を試みたが、翻訳をそのまま使用させていただいたものある。